

『みだれ髪』と『和泉式部歌集』

——晶子の古典文学観(一)——

千 葉 千 鶴 子

与謝野晶子の『和泉式部歌集』は、与謝野鉄幹との共著によって、大正四年一月に刊行された。

同書は「和泉式部歌集評釈」として、明治四十二年から同四十三年にかけて、雑誌『常盤木』に連載していたの

を、のちに一冊にまとめて出したものである。『和泉式部歌集』のあとがきに「始めより速記者をわずらわして……

…」とあるので、これは当時新詩社の人たちが集まって毎月開いていた茶話会で、鉄幹と晶子が輪講していた時の講

義録かと思われる。

晶子が和泉式部について書いたものは、この他に『新訳和泉式部日記』(三十九歳)『伝記女詩人和泉式部』(五十一

歳)『和泉式部の歌』(五十五歳)がある。

註一 創刊号(五月)三号(九月)四号(十月)六号(同四十三年三月)の四回に分載

註二 「本日の茶話会よりは席上にて『伊勢物語』を輪講することと相定め候。当日の速記は「明星」に掲載致すべく候。」(『明星』十三号の社告)とある。

註三 大正四年七月『新訳紫式部日記、和泉式部日記』(金尾文淵堂)として発刊、これより先、明治四十三年十二月『和泉式部日記評釈』として『常盤木』(七号)にその一部を掲載

註四 昭和三年に雑誌『女性』に「上」(一月)「中」(二月)「下」(三月)として連載

註五 昭和七年四月『短歌講座』第八巻の「女流歌人篇」

『みだれ髪』と『和泉式部歌集』

晶子の古典文学への見識は高く、とりわけ平安朝文学への造詣は深い。

日本の古典文学は決して万葉集に尽きるものではなく、平安朝の文芸復興が新しい創造の花実を豊かに示したので後の江戸文学をも発生せしめ、其他の芸術が悉く平安朝に影響されて起ったのである。博く公平に日本文学を味はって祖先の遺産を継がうとする人々は、平安朝の芸術を閑却すべきでないのは云ふ迄も無く、さうして先ず研究の第一歩を平安朝の文学に求める事は「人」としての情操の精錬にも役立ち、また奈良朝へ溯るにも鎌倉徳川諸期へ下るにも便利である。^(註一)

晶子が平安朝文学に渡したかけはしは大きい。『新訳和泉式部日記』の他にも『源氏物語』『栄花物語』『紫式部日記』『蜻蛉日記』『従然草』などの現代語訳や、伝記、評釈などの研究論考は、いまも朽ちることなく古典愛好家にはもとより、国文学者の間にも絶えず問題を提起しつづけている。

平安朝文学は、晶子にとって堺の町での少女の頃よりすでに親しく、「紫式部は私の十一・二歳の時からの恩師」^(註二)であり、大鏡、栄花物語などの歴史物語や、源氏物語、宇津保物語、挾衣物語、枕草子の名をあげて、その豊かな読書生活を語っている。

わたしは夜なべの終るのを待って夜なかの十二時に消える電灯の下で両親に隠れながらわずかに一時間か三十分の明りを頼りに清少納言や紫式部の筆の跡を偷み読みして育ったのである。^(註三)（清少納言の事ども）

長持の蓋の上にて物読めば倉の窓より秋の風吹く（火の鳥）^(註四)

晶子の語る「読書」の跡に、しかし、和泉式部の名は見えない。

晶子は、いつ、どのようにして、和泉式部と「邂逅」したのであるうか。

『和泉式部歌集評釈』を『常盤木』に掲載していた明治四十二年頃、源氏物語や栄花物語の講義、口語訳については、書簡などにもかなり意欲的な見解を述べている。

先ず御仰せの書物は源氏の註釈なりや講義なりやと申すことに候。

只今の源氏のかの仮名文字おほきを、てき当のかん字（おほく）入れて先づ目に見やすくすること、句点などのおほくたがへるをただしくすること（これらは何れも寛のいたし候こと）

それに私ら二人にて註釈をかの文学全書の落合氏の註釈に幾倍せるものをつけ候こと、それに絵を入れて書物にすること△（略）▽

私一生の事業としてそのことはいたしたき考へに候。

栄華は十五冊にかなり居り候ひしが、あのやうのあつさにて四十冊にはなることとおもひ候。△（略）▽

私など不学のものに候へど、式部のかきしものを直覚に私の感ぜしところを、講義いたさむとおもひ候。式部

と私との間にはあらゆる註釈書の著者もなく候。只本居宣長のみ私はみとめ居り候。△（略）▽

講義ならば云ふまでもなく、兩人にていたし申すべく候。

晶子の当時の書簡や手記には、和泉式部の名は語られていない。

晶子にとって和泉式部は、どのような「像」として在ったのだろうか。

註一 昭和三年七月『光る雲』（実業之日本社版）大正十五年七月二十日附の後記がある。

『みだれ髪』と『和泉式部歌集』

註二 『光る雲』（実業之日本社版所収）

註三 明治四十四年七月『一偶より』所収

註四 大正八年八月歌集『火の鳥』（五百五十九首を収む）からの一首

註五 明治四十二年九月十八日（神田東紅梅町二より）小林政治氏宛の書簡 晶子の記す日附は十九日になっている

一一

△（略）▽式部の歌の枕詞や縁語で奇を弄した作の多いのにくらべると、親王のは、其様な人口の痕が少なく、素直で面白い歌が詠んであります。当時に流行した技巧に偏した歌風から云へば、物の数に入らなかつたにせよ、今日から見れば立派な詩人であつて、式部との恋は、芸術的の恋だと私は思います。△（略）▽紫式部が和泉式部よりも赤染衛門の歌を掲げて「最上の歌とは言ひがたけれど、それこそ耻しき口（註一）に待れ」といつているのは賛成しかねます。

これは、『和泉式部歌集』の序に記されている晶子の和泉式部「像」であり、晶子が和泉式部について書き残したもののの中では最も早い時期のものであろう。同じ序で鉄幹が語っている。

和泉式部は当時の男性作家と同じく古歌を多く読んで其等の技巧を参照した。併し其等の修養が却つて此人の天才を傷けたこと多大である。既成文学の研究も悪くすれば却つて害がある。△（略）▽自家の恋愛生活を縦まにするに急であつて、歌を殆んど恋の実感として打出す表現にのみ用い、沈着な詩人的反省の態度を余りに欠いて居たことである。

鉄幹は、式部の歌を「技巧」にすぎると批判し、文学研究の態度にまで言及しており、又「歌」を「恋」の「実感」にのみ用いるのは「詩人的反省」の欠如であると、全面的に否定的な裁断を下しているのに対して、晶子は、歌につい

ては同じように「枕詞や縁語」による技巧的な歌であると批評し、むしろ親王の歌に素直な良さを認めたりしている。しかし和泉式部と親王との恋が「芸術的な恋」であることを認め、否むしろ讚え、式部の歌は「奇を弄した作」ではあるが、やはり紫式部が「和泉式部より赤染衛門の歌を掲げて」いるのは「賛成しかねる」と紫式部の歌評に批判を加えているのは興味深い。

歌を作り初めて数箇月の後に、私は主として恋愛を実感する一人の人間となりました。私は恋愛に由つて自分の生活に一つの展開を実現したのです。従つて私の歌の内容も更に急変しました。△(略)▽

私は自分の歌が驚く程、私の熱愛の繊細と熾烈と優婉との千姿万態を端的に表現して、千万語にも優る効果を示すことを経験しました。△(略)▽

私の歌に由つて私の愛情は十分に表現することが出来、私の愛情に由つて私の歌は俄に進境を開いた

晶子が語る『歌の作りやう』^(註二)は、恋愛と作歌の一元化を、自己の恋愛生活を告白しながら、創作の秘密を説き明しているもので、晶子の切ない歌話であり、確信に満ちた芸術論でもある。親王と式部との恋を「芸術的な恋」と讚えた晶子の言葉は、鉄幹と晶子自身の「恋」と「歌」の生活を誇る心情でもありさわやかである。このように詩人の実像を晶子は、式部を語ることに由つて巳を、巳を語ることに由つて式部を、いわば芸術家の理想像をも語っていた。

註一 『和泉式部日記』の序

註二 大正四年十二月『歌の作りやう』(「私はどうして歌を作るか」「歌とはどんなものか」)

『新訳和泉式部日記』は、晶子の三十二歳の時にその一部分を雑誌『常盤木』に発表し、そのまま放置しておいたものを三十九歳の夏、完訳で紫式部日記の口語訳と併せて一冊に合本し刊行したものである。和泉式部かとも思われ

る女人の王朝風俗が精緻な筆でえがかれて、上質の和紙の装丁と共に、平安朝女流日記の雰囲気を伝えるにふさわしい口語訳である。がその口語訳は、かならずしも秀れて原作に忠実な口語訳とは云い難い。一例をあげると、

しかおはしませどいとけちかくおはしまして、つねにまいるやと問はせおはしましてまいり待りと申し候つればこれもて参りていかが見給とて奉まつらせよとのたまはせつるとて橘の花をとりいでたれば昔の人のといはれ

てさらば参りなんいかがきこえさすべきといへばことばにて聞えせんもかたはらいたくてなにかはあだあだし(註一)くもまだ聞え給はぬを、はかなきことをもと思て

「けれども何処がお懐しい所がおありになるから、上つて居るのだらうね。」

これは和泉の言葉である。

「さやうでございます。」

と童は言つた。

「この花を師の宮様へ差上げてね、どう思召しますかと伺つて来て下さいな。」

和泉は一枝の橘の花を童に渡した。

「花橘の香を嗅げば昔の人の袖の香ぞする、と言ふやうな御返事を頂いて参りましやう、併し初めてでおありになるので御座いませうから、何か一寸御挨拶のお言葉でも御座いましたら伺つて参りましやう。」

と童は言つた。道理ではあるが、言葉で言ふことは困ると和泉は思つた。師の宮様はお若いが、浮気な方と云ふ名も取つておいでにならないのであるから、自分で歌で御交際を初めても迷惑なやうなことは何処からも起つて

来ないであらうと思つて、

和泉式部日記は、その複合的性格によつて非常に難解な作品であり、今日なお諸説があつてその評釈も定まっていない。しかしここに引用した口語訳は、まことに乱暴である。「おはしまして」「のたまはせる」などの敬語に、まるで注意が払われていない。その不注意によつて「ちばなの花」が、和泉式部から師宮敦道親王に手渡されるという、全く逆な解釈になつてしまつている。この部分においてはやはり文法的解釈の間違いであることを認めざるを得ない。が晶子のこうした類の間違いが、又は不注意が、晶子の古典的教養の評価の基準には決してならない。池田亀鑑氏は紫式部日記の新訳の一部分をとりあげて次のように語つている。

夫人の訳がどのやうな性格のものであるかといふことが、一見すぐ分るであらうと思ふ。ともかく遂語訳でない。大胆な意識であるといふことが誰の目にもつくにちがひない。一語一句などにかがづらつてをらず、原作者の作家体験の世界に、直接にまつしぐらにきりこんで行く態度である。(略)

晶子の古典の新訳においては、あのやうな大胆な意識がなされる前に、その準備として精密な遂語訳が、——それが筆にされると否とを問はず——用意されてゐたであらうか。おそらくそれは用意されてゐなかつたであらうと思はれる。夫人は古典の原文をよむ、その印象を全体としてとらへる。原作者の体験したに相違ないと信ずる一つの世界を幻想する、さうして、原文に即くともなく、離れるともなく、新しい彼女独自の文章構造と言語表現によつての原作者の意味したところのものと、それらをつつむ情緒と雰囲気とが再現されたといふ確信と満足とを経験することができた。それが晶子の古典への方法であつた。強烈な主観の光を照明することによつて対象を把握し、再構成しようとするのである。(註二)

晶子は文化学院の「国文科」の主任として、古典文学の講義をしていた。しかし国文学者と謝野晶子としてではなく、詩人として、批評家としての彼女の個性が、教師と謝野晶子の仕事の特質であつた。

註一 武蔵野書院刊行の影印本三条西実家旧蔵「和泉式部日記」(伝実本)より引用

註二 『冬栢』第二十一巻一・二月号(昭和二十五年二月発行)・古典学者としての与謝野晶子(創刊二十年記念特輯)「晶子と近代抒情」より

註三 大正十年四月に西村伊作氏と共にスルガダイに創立。没年前昭和十六年まで学監として仕事にたずさわる。

日本文学史の上に光る才女が幾人かあるなかで、紫式部と清少納言は最も大きく輝く星ですが、次に赤染衛門と小野小町と和泉式部とを数えねばなりません。

才女たちの名が世の中に知られているわりにその作品の価値とその人の伝記とが十分に広く知られていないのを遺憾に思ひます。ただそれは理由のあることで、どの才女についても、従来の伝記は粗略な上に誤りをも含んでいたのです。私はかつて紫式部の伝記を書きました。今日からみると増訂したいところに気づいていますが大体において私の研究は間違っていないと思ひます。今は和泉式部に関して述べようと思ひます。^(註一)

言葉どおりにこの伝記は、詳細な調査にもとずいて、晶子の詩人としての豊かな感受性が鋭い洞察力に支えられ、精緻な考証のうえにたつて論究されており、和泉式部の「像」は、ここに華麗な筆で見事に息づいている。

和泉式部の出生を、天延二年^(註二)(九七四)と考証した学説は、国文者による諸説と共に国文学界において絶えず問題視されている。

晶子の古典文学に対する真摯な研究態度は、この伝記において秀れた研究成果をうみ、この論考は、学説史的にも重要な価値を持つ。そして、先に引用した『新訳和泉式部日記』における間違いの部分も『伝記女詩人和泉式部』の中で正しく理解されている。

敦道親王はこの花を贈って、同じく喪中に在る式部を慰問せられたのですが、ただ一語「如何眺め給ふ」と小

舎人に言わせて、この花を贈られた親王の気の利いた、かつ優美な音間に対して、はげしい情熱と尖鋭な才氣とを持ってゐる上に、折柄とくに感傷的になつていた式部は、即座に夏の景物を用いて「薰る香に比ふるよりは杜鵑聞かばや同じ声やしたる」といふ歌を詠んで答えました。^(註三)

歌人、和泉式部は晶子にとって二十数年間——三十すぎから五十代のなかばまで——それは歌集『佐保姫』を出した年から、始めての『与謝野晶子全集』^(註五)が出版された前年までの年月、詩人、与謝野晶子の円熟期を通じて歌に、歌話に、論考に、又は現代語訳にと、和泉式部の「像」は圧倒的に造形されていく。

彼女は天成の恋愛詩人で、恋と歌とは彼女の一生に体験せられて分かつべからざるものばかりでした。恋のために歌を詠んだのか、歌のために恋をしたのか、二つのものが全く一つである観を呈しています。^(註六)

これは晶子が自身の「創作過程」を述べている「歌話」ではない。

自己と内心の生派に即した生きた新しい歌を読み、物の感じ方において、言葉の列ね方において概念や先例に囚られるところがなく、勁くして優しい一新体を創造したのです。^(註七)

勁くして優しい一新体を創造したのは晶子自身ではなかったか。

必ず彼女の敏捷な機才と豊富な趣味性とから新たに案出せられたもので、しかもそれは、想像力と情熱とに乏しい他の歌人が智巧を持ってゆるゆる工夫したのとは違い、彼女の感情と技巧とが光と熱との如く、同時に激発するので、読む者に力強い感銘を与えるのです。彼女ほど実感を歌った歌人は稀であり、それが常語より遠く抜けて出でて詩の領域に入るのでした。^(註八)

かさねて言う。これは晶子が、晶子自身の歌について語っているのではない。晶子は和泉式部の恋を語るに、己の恋を語る如く、己の歌を語る如くに、式部の歌を語る。

- 註一 『伝説女詩人和泉式部』の序
註二 『栄華物語』の「初花の巻」の寛弘二年の記事から類推してた出生年月日
註三 『伝記』序
註四 明治四十二年『和泉式部歌集評釈』より、昭和七年『和泉式部の歌』発行までの年月
註五 昭和八年(五十六歳)改造社より、『与謝野晶子全集』刊行
註六 『伝記』の序
註七 『伝記』の序
註八 『伝記』の序

三

いにしへの和泉式部にもいひし加茂の祝はわれを見知らず^(註一)

晶子、三十二歳。明治四十二年五月刊行の歌集『佐保姫』に載る一首である。

『佐保姫』には、明治四十一年六月から、四十三年三月までの一ケ年の間に詠まれた歌、五百十四首が集められている。この歌数は、晶子がそれまでに出版したどの歌集よりも多くの歌が収められており、この一ケ年の間に詠まれてはいるが、この『佐保姫』に編まれたかった歌、百八首^(註二)をも数えると六百二十二首となる。これは『みだれ髪』時代とほぼ同じ作歌数にのぼり、晶子の円熟期を語るにふさわしい歌集といえる。

『佐保姫』刊行の前年、つまり明治四十一年は『明星』が終刊号を出した年である。明治三十四年四月『明星』創刊の翌年に『みだれ髪』が刊行、このはなばなしい歌壇への登場を、『明星』を舞台にしてほしいままにした晶子が、『明星』終刊の翌年、その舞台の終りを哀悼するかのように、静かな雅美を歌った『佐保姫』を出したことは、何か

暗示的でさえある。東京新詩社の推移もしのばれ感慨深い。そしてこの年『常盤木』に、晶子の『和泉式部歌集評釈』が掲載されはじめた。

「加茂の祝」というのは、『伝記』の中で晶子が考察している寛弘二年四月の賀茂の祭の△「親王もまた和泉式部と同乗して、観衆の目を驚かし給うのでした。その光景を讀めて『大鑑』の筆者は、『師の宮が和泉式部と一緒に車にお乗りになって、祭の帰りの行列を御覧遊ばした光景は非常に面白いことであった。お車の口の簾を中央から豎に切らせ御自分のほうを高く巻きあげ、式部のほうは下げて、その下から盛装した式部の衣を出させ、紅の袴に赤く広い紙で作った物忌みの章を付けたのを、地につくまで長く垂れさせられた有様は、祭の行列よりもみなそのほうに目を集めるのであった』▽ことを素材にして詠んでいるものと思われる。

『明星』終刊と共に、晶子の芸術的生涯は一つの区切りをもった。生活は常に苦境にあったが、夫鉄幹との「愛」と「歌」の歴史は、晶子をして親王と式部どの恋を「芸術的な恋」と言わしめるまでの自信を与えていた。その自信と誇りが、この歌を詠ませたのであろう。

一首の意は、（あなたを様々に口さがなく批判した加茂の祭りでの出来事、そこに集まっていた人たちが私を知っていたのなら、この私をやはりあなたと同じように批評するのであろう。和泉式部よ、私はそんなあなたに逢って言いたい。ここにもあなたと同じ生き方をしている女がいるということ）とでも言うのであろう。「いひし」は強い語調を表して妙である。『明星』の衰退にもなつて、失意の中に居る夫鉄幹をフランスに留学させるため、多くの子供を育てながら、旅費の調達に心にそわない仕事の数々を引きうけて果し、精神的にも身体的にも極限のつかれに追い込まれながら、夫鉄幹への「愛」と我が「歌」への情熱に身をさいなむ日々の中でこの歌は詠まれたのであろう。和泉式部への共感であるうか。否、むしろ救いを求める声だろうか。

和泉式部の「像」は晶子の胸に焼きついて、彼女を激しく動かしていく。

註一 『佐保姫』に収む一首

註二 『佐保姫』拾遺

春曙抄に伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくずれけるかな

(註一)
(恋衣)

兼好を語るあいだに伽羅たかむ京の法師の麻の御ころも

(恋衣)

貫之も女樂めされし樂人も短夜の帳の四面に侍れ

(註二)
(夢の花)

女をかち近衛づかさは櫻まきて供養にぞまいる伊勢物語

(夢の花)

清氏が女なかにあるらむ好車すぎぬ暮して花しろき山

(註三)
(常夏)

ほととぎす治承寿院のおん国母三十にして経よます寺

(恋衣)

あてびとの御膝へおぞやおとしけり御幸源氏の巻絵の小櫛

(舞姫)

歌は問はじ命婦の職か弁の君か眉黛せめて濃く打ち給へ

(小扇)

みかど知らず古事記しらずのやまと人をレモン咲く野に放たせ給へ

(毒草)

鬼が栖むひがしの国へ春いなむ除目に洩し常陸ノ介と

(恋衣)

野分姫ももたり手とりしろがねの靴して来たる花ぐさの上

(常夏)

和泉式部の名を詠み込んだこの一首の他に、晶子には平安朝文学を素材にして具体的に人名や作品名を取り入れた艶麗な歌が数多くある。それらの歌には、王朝文学への博識と、平安朝時代への憧れ、雅びた殿上びとへの親しみが顕れている。

作家によつて歌に、「叙景」とか、「写生」とかいう種類があつて、それが「叙情」と區別される物だと考へて居られるやうですが、私はさうとは考へません。歌はすべて叙情詩だと信じてゐます。——要するに作者の内に生じた実感を表現するのですから如何なる歌も出来上つたものは皆叙情詩です。

実感さへ発潑刺として意識の奥に持続して居れば、たとえ十年前に或静物や或自然、或人事から得た実感でも、それが今日に表現せらるれば、当然今日の実感であると思ひます。

金子薫園・尾上柴舟の「叙景詩」運動や、正岡子規の「写生主義」に対する晶子の反対論であり、晶子は例え叙景の歌を詠んでも、対象となる風景を、憧憬の炎でつつみ、現在の時点において詠むことを主張する。ここに引用した平

安朝を素材に詠んだ歌であっても、その時代を、人を、物を、現在の自分が生きている所へひきよせて詠んでいる。あたかも晶子のそばでさざめいているような息吹きが感じられる。

註一 明治三十八年一月本郷書院より発行。巻頭に「詩人薄田泣菫の君に捧げまつる」とある。山川登美子、増田雅子との合同詩歌集。

註二 明治三十九年金尾文淵堂より刊行。巻頭に「浪華なる小林政治の君に捧ぐ」とあり三百七首を収む。

註三 明治四十一年七月大倉書店より発行。巻頭に「馬場孤蝶の君に捧ぐ」とある。

(一) 月あると同車いなみしとが負ひて歌おほくよむ夜のほととぎす (恋衣)

(二) 集のぬしは神にをこたるはしためか花のやうなるおもはれ人か (恋衣)

(三) 五月雨外のかた見れば憂き朝の使いこいぬたちばなの花 (舞姫 拾遺)

(四) たちばなの香の樹蔭はゆかねども皐月は恋し遠居る人よ (夢の花)

(五) まつり日の物見車のひとつとも君がみまえへに在りける宵よ (夢の花)

(六) 加茂人は忘れさせよとことずてし御禊を神におこたり得らむ (佐保姫)

(七) 君まさず葛葉ひろぐる家なればひと草むらと風の寝にこし

(夢の花)

ここにあげた歌は、和泉式部の歌や日記などに類似を見るものである(便宜上番号をつける)

(一)は和泉式部日記の中にその情景を見ることが出来る。

車をさし寄せて、ただ乗せに寄せ給へば、我にもあらず乗りぬ。人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけにければ知る人もなし。やをら入もなき廊にさし寄せておりさせ給ぬ。月もいと明かければ、「おりね。」としてのたまへば、あさましきやうにておりぬ。

ここに引用した部分は、敦道親王が和泉式部の家では人目があって、ゆっくり話し合うことも出来ないので、親王が別宅へ式部を連れていく所である。「月あると同車いなみし」と云うのは、平安朝時代の女性は光(太陽や月)に顔を顕わにすることは恥かしいこととされていた。それで「同車いなみし」その「とが負ひて」恋しさにほととぎすのように歌をうたいつづける、哀しい夜をすごさねばならない。(つまり同行することを拒否したがために恋人といっしょにいられず、その哀しみの歌を切々と作って夜をあかす。)ほととぎすは、人をよぶ鳥とされているが、ここではその意味と今一つ敦道親王との最初の贈答歌にあったほととぎすを合せて、暗示的に歌っているものと思われる。

このような日記の事実は、晶子の歌の素材として生きているが、晶子の歌の意は(愛する人の意に従わなかったために、一そうその愛が激しく炎えあがり、その情炎で身を焼きながら又それ故になを歌わずにいられない)という不思議な、女の恋の心を歌って切なく哀しい。

(二)「集のぬし」というのは歌集の作者で「神におこたるはしたため」は和泉式部のことと思われる。式部は恋の苦しみから神仏に救いを求める歌を多く詠んでいる。(この歌集の作者は、恋のなげきからのがれることの出来ない可愛

そんな女なのか、それとも恋人から、花のように愛されている幸せな人なのだろうか)の意であるがこれは全く晶子自身の姿を詠んでいると思われる歌である。

(三)も日記の一節が想起される。

五月五日になりぬ、雨なをやまず。一日の御かへりつねよりももの思ひたるさまなりしを、あはれとおほしいでて、いたうふり明したるつとめて

「こよいの雨の音は、おどろおどろかしつるを。」

などの給はせれば

「よもすがらなにごとをかは思いつる窓うつ雨の音を聞きつつ」

(四) 橘の花咲くさにすまへども昔をきとふ人のなきかな (『私泉式部歌集』六六九)

(五) 和泉式部の姿の投影している歌で加茂の祭に敦道親王と一つの車に同乗した時のはなやかな幸せを詠んでいる。しかし、これもやはり鉄幹と共にいることのはなやいだ、晶子自身の心を歌っている。

(六) これは(親王と同乗して、加茂の祭に出かけた時の口さがない人達が、いつまでもその時のうわさをするので、神に人々のうわさの早く消えることを祈った。だがその祈願がまだ足らないのであるとか)という和泉式部の心情を詠んだ歌であろうが、鉄幹と晶子の間が、山川登美子の再度の上京によって、はしたない人々の思わくなどでわずらわされ、いたたまれない心情を武部の心をかりてよんだ歌と思われる。

(七) 松垣に這い来る葛といふ人は見るにかなしき秋の山里

つらしともそれはしひてはおもはぬに猶身にしむる葛のうら風 (『和泉式部歌集』五七六)

ここにとりあげた晶子の七首に、和泉式部日記、又は歌集にその情況の似通ったものを探し求めてみた。しかし、その類似はあくまでも素材のみであって、晶子によって詠みあげられた時は、すでに式部の恋の情調は消えてしまっている。と同時に、晶子の歌の感動の源泉に散りばめられ、きらめくようにその映「像」は、晶子として蘇生している。

四

くる髪の干すじの髪のみだれ髪かつおもにみだれおもひみだるる
(与謝野晶子)

黒髪の乱れも知らずうち伏せば先ず搔きやりし人ぞ恋しき
(和泉式部)

この二つの歌の伝えるものは、おどろくほど似かよっている。

晶子の歌は『みだれ髪』の中の一首である。(わたしのたわわな黒髪は、恋の思いに干々に乱れ、その髪の乱れが、乱れる私の心をますます乱す。どうしたらよいのだろう。わたしの心は乱れるばかりだ)とでもいうのだろうか。恋に心乱す女の姿態が、切なく艶麗に歌われた動きのある歌である。「髪のみだれ」に「心のみだれ」を掛けて、恋する女の何如とも為し難い心情の動きをとらへて、まことにあざやかである。

『みだれ髪』は、明治三十八年八月十五日、東京新詩社と伊藤文友館との共版で刊行された、鳳晶子の第一歌集である。所収歌数を三三九首にとどめ、四百首に一首残して未来への可能性を示した「運命」の書である。

鉄幹が、新詩社と『明星』の危機をうらなひ、晶子は、鉄幹との「恋」と「歌」の情熱を賭けた。そして、それはやがて日本の短歌史上において一つのエポックメイキングとなる「運命」を背負った。

『みだれ髪』は耳を敬てしむる歌集なり。詩に近づきし人の作なり、情熱ある詩人の著なり、唯容態のすこしほのみゆるを憾となし、沈静の欠けたるを瑕となせど、詩壇革新の先駆として、又女性の作として、歓迎すべき価値多し。基調の奇峭と其想の奔放恣にれて、慢に罵倒するものは文芸にあらざ。(註一)

上田敏のように理解ある批評ばかりではなく佐々木醒博士の「必意肉の声」という倒罵、『心の花』の『みだれ髪』一篇三百九十九首一言以て之を掩へば悉く皆是春画」という酷評などいかにもさわがしく、鉄幹は「『みだれ髪』に対する世評は、甲是乙非、誠に騒然たるもの有之。」と同年九月五日付『明星』(十五号)社告で語っている。しかし又「『みだれ髪』うつくしと申すもおろかにて候かな。『紫』と共に携へまゐりて、打誦し若き血潮の胸のゆらぎ申候」というのが一般の若い人たちの感動の声であった。(註二)

このように賛否両論、騒然としたなかで、『明星』は危機を脱し、晶子は鉄幹の妻に、歌壇の女王に、運命の書はそれぞれの運命を未来につないだ。

註一 明治三十四年十月『明星』十六号

註二 明治三十四年九月『明星』十五号に収録(中西やす)

『みだれ髪』の全三九九首は制作年月とはかかはりなく、歌の内容によって排列されている。先ず「臙脂紫」(九八首)「蓮の花船」(七六首)「白百合」(三六首)「はたち妻」(八七首)「舞姫」(二二首)「春思」(八〇首)の六章に分けられているが、『みだれ髪』に収められるまでに、すでに発表されていたものが二八四首ある。したがって『みだれ髪』に初めて発表された歌は一一五首で、これらの殆んどは三十四年七月以降の作品と考えられる。又す

でに発表されていた作品二八四首のうち、三十三年度までに発表されていたものは六八首であることから全三九九首のうち六八首をのぞく三三一首が三十四年に作られた歌とみなされる。

くろ髪の干すじの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる

式部と歌と対比させた晶子の一首は、『みだれ髪』の中の「はたち妻」に初めて発表されたもので、したがって三十四年七月以降、『明星』発刊までの短い期間の「ある時」に詠まれたものと考えられる。

黒髪の乱れも知らずうち伏せば先ず搔きやりし人ぞ恋しき

(丈なす黒髪が乱れるのもかまわずに、恋の思いに耐えられずうち伏せば、その髪をやさしく撫であげてくれたその人が、又も思いしのばれて恋しくますます心乱れる)とでもいう意であろう。

この歌で「黒髪の乱れ」と置いた句は、単に髪の乱ればかりを言ったのでなくて、悲しみのなかに取り乱している心持をも、姿をも、暗示しているのです。一句を一義のみに用いないで、それによって他義にまで押し及ぼして連想させる技巧を「象徴」といいますが、この「黒髪の乱れ」という句も象徴的だと思います。

「先ず搔きやりし」と言って、「先ず此の我が髪を搔きやりし」という風に言わないのは、第一句の「黒髪」に兼ねしめておいて、「髪」という語を繰返さずに済ませる「短歌の省略法」です。(註一)

晶子の歌評である。このなかで晶子が強調している象徴という言葉は、上田敏の媒介によるフランス象徴詩派からの

影響で、晶子の歌に対する感性は、この新しい技法を持つ象徴詩に敏感な反応をしめした。そして上田敏の訳すフランス象徴詩は、晶子の資質と相呼応して用語などに大きな影響を与えている。それは、晶子の古典的浪漫性と、フランス象徴詩派の技法が、彼女の個性の上に融合し、情調的象徴として晶子の歌に見事に昇華した。『みだれ髪』は、このような意味で晶子にとってまさに、「象徴的」であり、又晶子のこの歌は『みだれ髪』の「象徴」である。一首は後に『晶子短歌全集』^(註二)において

くろ髪の手すじの髪のみだれ髪おもひみだるるおもひみだるる

となり「かつ」が削除されている。「かつ」という語は歌語としてはほとんどみられないが、やはり和泉式部の歌にある。

限りあればかつすみわたる世の中に有明の月をいつまでか見む

「かつ」という言葉は歌語としては固く、又その意味も理屈っぽく歌のなかに融け合ない感じはするが、晶子の一首はやはり「かつ」を削除していない初出のものの方がよい。「かつ」という語で一首の歌調がひきしまり、又意味のうえでも、恋の理智と情念の様相が表現でき得て、適確な語として生きている。

式部の歌の「先ず搔きやりし人ぞ恋しき」の「先ず」は、これもやはり説明的で本来ならば、歌の調子を破る働きをする語であるが、一首のながれる様な調子をひきしめて、情意のうえでもいたずらに恋のなげきにうち流される心

情を「先ず」という語によって、己の心をみつめる無意識の智恵をひらめかせている。

晶子は和泉式部のこの一首を晶子自身の作歌の前に目にはしなかつたであらうか。かつて一度もよんだことはなかつたのであろうか。

私の歌は、或る年頃になつて私の内に歌で現わさねばならない感動が起りましたので、それをどうしても歌はねばならない羽目になつて歌い出しました。唯それだけです。私の歌は直接に私の読書とは少しも関係がありません。(註三)

註一 『和泉式部の歌』(昭和七年四月) 改造社版『短歌講座』第八卷

註二 大正八年十月 新潮社刊

註三 大正八年八月『激動の中を行く』

晶子は「歌を作り初めたは明治三十年頃の二十歳前後」(歌話)で、三十年七月に創刊された『よしあし草』の支部が三十一年浪華青年文学会堺支会を結成した時、弟の籌三郎と共に速早加入している。その堺支会で、晶子は河野鉄南と知偶した。それ以来晶子は毎月数通の手紙を書き送っている。

ときいろのリボンの玉のあらずなりてさびしさたへがたきにつけ御あたりなつかしくとくきこえ上まほしかりしかどあまりにたび重ねてはとけふまでわかきちをおさへ居り候ひき

木下やみわかばの露かにほひあるしづくかかりぬふたりくむ手に

これは夢にてはななくうつつにてはもとよりなく現実ならねばあなたさまにあらためて申上るまでもなく候、何時やらむ御前さま都にありし頃は加茂のただすのあたりをよくぞそぞろあるきせしと仰せられし、それをもととしてそれからそれへと空想の花をそへてわかばゆかしきかの森のあたりをかたみに歌かたりつつゆかばみたらし川の流れにもすそともぬらしてなどこのやうな事思ふては誠に失礼などは存じながら毎日さる空想にばかりふけ居

り候（略）

さりし世のきそのうらみはいねやらぬそのあけがたにほととぎすきく

ほととぎすはうそに候（略）

何やらかく事あまたわすれしこち候へどあまりながく相なり候まま

歌かきて君がをくりし薄やうにわれ口べにのあととめけり

わかかへでにほそき雨そそぐあした^{（註一）}

夢よりもはかなき世のなかを嘆きわびつつ明かし暮すほどに四月十余日にもなりぬれば木の下くらがりもてゆ
く。築地のうへの草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬをあはれとながむるほどに（略）

この書簡と『和泉式部日記』の冒頭の文章の類似は偶然のものなのだろうか。

さりし世のきそのうらみにいねやらぬそのあげ方にほととぎすきく

書簡の晶子の歌を和泉式部の次の歌と比べてみる。

ひをしねで夜ごとにきけばあはれにも鳴きまさるかな鈴虫の声

（和泉式部）

晶子がそれまでに、和泉式部の歌集や日記にふれることがなかったとするならば、これらの類似は、「時」と「処」を違えても同質の個性的発想は、同様の形象を創り得るといふことの稀有な例としなければならぬ。

「言葉の芸術」、である歌は一首ごとに新しい芸術品を作ろうとするのでございますから、徹頭徹尾新しく作らねばなりません。模写と繰返しは大禁物でございます。流行の万葉語で歌を詠む人も、古今の歌人に発明権のある作品と類似した歌を作る人も、それは「創作家」の名に値しない人達だといふことになります。この意味で私は自分の歌の上でも昨日の自分が発明した所を繰返さないやうに致してをります。(註二)

又、

万人の歌に共通する客観的の作法、さういふものは全く無いものです。なぜなら、それは歌の本質が個別的なものであるからです。人々の品性と生活が個別的なものである以上、その個別的の品性と生活の表現である歌が内容と形式とを他人の歌と異にするのは当然だからです。要するに歌は十人十色であるべきもので、一定した共通の作りやうなどがある筈はないのです。(註三)

とするならば、和泉式部の歌と晶子自身の歌との類似性は「模写」と「繰返し」ではなく、「個別的の品性と生活」の類似性としなければならぬ。

その日より魂とわかれし我むくる美しと見ば人にとぶらへ

(晶子)

ねし床に魂なき骸をとめたらば無げの子われと人もみまかし

(和泉式部)

ひと遠き越の旅人おもふごと夕空ながめあれば君来ぬ

(晶子)

つれづれと空ぞみらるる思う人天下り来んものならなくに

(和泉式部)

右にあげたものは、その「意味」、その「情調」において、その「用語」において、極めていちじるしい類似性を示している。

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

(晶子)

いさめますか道ときますかさとしますか宿世をよそに血を召しませな

(晶子)

歌もろし春みじかしをまどいなく説く子ありなば我みちきかむ

(晶子)

いとまなみ君来まさずは我ゆかむふみつくるらむ道をしらばや

(和泉式部)

わがやどにたずねて来ませふみつくる道をしへんあひもみるべく

(敦道親王)

あふみじは神のいさめにさはらねど法のむしろにをればたたぬぞ

(敦道親王)

われさらばすすみてゆかむ君はただ法のむしろをひろむばかりぞ

(和泉式部)

ここにとりあげた贈答歌は、『和泉式部日記』のなかにあるものだが、晶子の歌と較べてみると、やはりその「用語」と「技法」の類似性がみられる。しかし、この贈答歌の「情緒的な恋」の「軽さ」とは全く対象的に、晶子の「理念的な恋」の条理が非常な「重さ」でよまれている。そして、晶子の歌も贈答歌の形をとっているが、それは鉄幹に与えるにとどまらず、女の恋の心情を普遍的情感としてうったえている。それに対して和泉式部と親王との贈答歌は、お互いの中にのみ通い合う思いでしかない。

ふりかえり許したまへ袖だたみ闇くる風に春ときめきぬ

(晶子)

春の夜の闇の中くるあまき風しばしかの子が髪に吹かざれ

(晶子)

なつかしの湯の香梅が香山の宿の板戸によりてまちし闇

(晶子)

梅が香におどろかれつつ春の夜はやみこそ人はあくがらしけれ

(式部)

これらの歌にも「用語」と「情趣」との類似性を見ることが出来る。

このように晶子と式部の歌の類似性をとりあげて来たが、式部が「実感」に則して日常的な「用語」を歌に「形象」

しているのに対して、晶子の歌はその「用語」に晶子自身の「情念」を「形象」化しているといえる。

註一 明治三十三年四月二十五日付 書簡 河野鉄南宛

註二 大正四年十二月『歌の作りやう』

註三 大正四年十二月『歌の作りやう』

乱れ髪

額にも、肩にも、

わが髪ぞほつるる。

しほたれて湯滝に打たるる心もち……………

ほっとつく溜息は心の如く且つ狂ほし。

かかること知らぬ男、

我を褒め、やがてまた誠るらん。

この詩は、昭和四年一月二十日に発刊された『晶子詩篇全集』^(註一)の中の「第一の陣痛」^(註二)(雑詩四十一篇)のうち的一篇であるが、いつ作詩されたかは明らかではない。

わたくしは今年の秋に、少しの暇を得ましたので、明治三十三年から最近までに作りました自分の詩の草稿を整理し、其中から四百二十篇を選んで此一冊にまとめました。(中略)

永い年月に草稿が失われたので是に収め得なかったもの、また意識して省いたものが併せて二百篇もあらうと

思ひます。今日までの作を総べて整理して一冊にしたと云う意味で「全集」の名を付けました。制作の年代が既に自分にも分らなくなっているものが多いので、ほぼ似寄った心情のものを類聚しました。統一のないのは私の心の姿として御覧を願います。

右の序と、「今年長くも御即位の大典を挙げさせ給ふ拾一月一日に、此校正終りぬ。」というあとがきにより、明治三十三年から昭和三年十月頃までの、およそ三十年間に及ぶ年月に書きあげられた詩の一篇であろう。

伴 奏

われはをみな、

それゆえに

ものを思ふ。

にしき、こがね、

女後、后、

すべて得ばや、

ひとり眠る

わびしさは

をとこ知らじ。

黒きひとみ、

ながき髪、

しじに濡れぬ。

恋し、恋し、

はらだたし、

ねたし、悲し。

これも同じ、『全集の』「薔薇の陰影」に収められている。がこれは大正五年一日刊行の『伴奏篇一輯』からの転載である。

いかが語らむ

いかが語らむ、おもふこと、

そはいと長きころなれ、

いま相むかふひとときに、

つくしがたき心なれ、

わが世のかぎり思ふとも

われさえ知るは難からし、

君はた君がいのちをも

かけて知らむと願はずや

夢のまどひか、よろこびか、

狂ひごちか、はた熱か、

なべて詞に言ひがたし、

心はただ知れ、ふかき心に。

これは明治三十八年に発刊された『恋衣』に収められている。

さて、ここにとりあげた「乱れ髪」は和泉式部の

黒髪のみだれも知らず伏ちふせば先ず搔きやりし人ぞ恋しき

(和泉式部)

を想起させ、「伴奏」は

『みだれ髪』と『和泉式部歌集』

物をのみ思ひねざめのとこのうへにわが手枕ぞありてかひなき (和泉式部)

我が袖はくらきよなかのねざめにもさぐるもしるくぬれにけるかな (和泉式部)

を連想させる。そして「いかが語らむ」に至っては

ともかくもいはばなべてになりぬべしねに泣きてこそみせまほしけれ (和泉式部)

とまったく重り合ってしまう。晶子をして「隱影多き灯下の薔薇^(註三)」といはしめた和泉式部、△われおみな／それゆえに／もの思ふ▽と歌う晶子の「伴奏」が、「薔薇の隱影」に収められているのは決して偶然のことではなく、式部の歌がやはり積極的に彼女の詩作に影響を与えていたことを意味している。

註一 昭和四年一月二十日 実業之日本社より刊行

註二 昭和二十二年創元社より刊行の入江春行著『与謝野晶子書誌』においては『与謝野晶子詩篇全集』の解題のうちに「第一の陣痛」のみ記されていないのは誤りか

註三 『伝記女詩人和泉式部』

五

『みだれ髪』は、晶子がまだ堺にあって鉄幹への思慕と、歌への情熱にかられていた頃から、すでに鉄幹によって企画されていたもので、明治三十四年五月二十五日発行の『明星』第十二号の社告欄にその予告の記事が載せられている。

思想に格調に変幻百出して、独創の奇才優に新詩壇の一生面を開き、之に盛る構に紅恨意災々の懊悩の情熱を以つてするものは、我が鳳女子の歌にあらずや。我藤島先生の画又最も進歩せる独得の筆致を以て、最も清新なる特長を発揮せらる、日本刻下の文芸界に於て、能く最新、最善、最高の思想を代表せるものは即ち本書歟。

そして同社告に

七月下旬に本社より発行すべく体被等の目上意匠中に候とあり、十三号の社告欄に

体裁は小生の『紫』と同一の体裁に成り、それに藤島氏の挿面を得て、桃色のリボンを以つて綴じ申すべく候。^(註三)
このようにはっきり発表したにもかかわらず八月一日発行の『明星』第十四号の社告欄で

製本の体裁も亦意匠も変更し候ため小生の『紫』などの遠く及ばざるものと相成り候は、出版物の一進歩と存ぜられ候。と体裁、意匠の変更を述べている。社告として号を追い、次々と『みだれ髪』の様相を知らせるなど、出版までの鉄幹の綿密な配慮がしのばれる。それは晶子の歌に対する評価と、晶子によせる愛情と、『明星』の浮沈にかける氣勢でもあった。このように『みだれ髪』は鉄幹の情熱を一身にあびて世に出た晶子の高らかな「恋の讃歌」であった。燃えあがる「青春の情炎」をほしのままに歌ってあまりある「春のおごり」の書でもある。

秋風にふさわしき名をまいらせむそぞろ心の乱れ髪(註二)の君

晶子におくった鉄幹のこの「歌」が、この「歌集」の題名になったと云われ、事実この「歌」をおくられてのち晶子は、自ら「乱れ髪」と署名して歌を発表したりしている。しかし、この歌集『みだれ髪』の企画によって、鉄幹が与

えた「乱れ髪」は、晶子の髪の乱れをたわぶれて詠んだ「そぞろ心の乱れ髪」に加え、晶子の歌のその激しい女の情念の乱れを表すのに、ふさわしい名として与えたのであろう。そして、晶子がこの書名『みだれ髪』を得たとき、そこにははっきりと和泉式部の「黒髪の乱れもしらずうち伏せば先ず搔きやりし人ぞ恋しき」が思い起されたに違いない。

前述したように『みだれ髪』初出の歌数三百十五首を三十四年七月以降のものとするならば「くる髪の千すじの髪のみだれ髪かつおひみだれおもひみだるる」という晶子の歌は、歌集名『みだれ髪』を得てから後の作品だと考えられる。とすればこの晶子の歌は、和泉式部の一首を明らかに意識して作ったと考えることも出来よう。

私の性格の極端な潔癖と、極端に模倣性の欠けてゐることは、他から御覧になれば、病的だとお考へになるほどです。それで私は他人の思想感情を味はつて自分の生命の糧にすることは出来ても、それを意識無意識に関らず模倣して自分の魂に黄金鍍金を施すことは不可能な人間です。(註三)

「意識無意識にかかわらず模倣」することは「不可能な人間」だが「他人の思想感情を味はつて自分の生命の糧にすることは出来る」と。

晶子にとって和泉式部はまさに「生命の糧」であり、歌集『みだれ髪』誕生の母韻であった。

『みだれ髪』成立を期として、与謝野晶子と和泉式部の「邂逅」は、血脈に覚醒し、和泉式部の「像」は『みだれ髪』の中に与謝野晶子として創生した。

晶子にとって和泉式部は会うべくして会った「運命」といえよう。

註一 (三十三年四月廿五日) 附の鉄南宛の手紙の冒頭にある「とき色のリボン」とと関りがあるのだろうか。世に出たみだれ髪に「桃色のリボン」はなかった。ちなみに、同書簡の三首の歌のうち、「木の下やみわかばの露かにほひあるしづくかかりふたりくむ手に」と「ものかきて君がたまらひ薄葉にあなはしたなしに紅のあり」は『みだれ髪』(拾遺)にのこされている。

註二 『明星』、明治三十三年十一月

註三 晶子歌話大正八年十日発行